2016年9月1日　アクセス　（1976年11月10日第三種郵便物認可）　第476号

地方小出版 情報誌 アクセス

毎月1回　1日発行
購読料　定価150円（本体139円）
年間1,500円（税込み）
振替　00120-0-19017

発行所　㈱地方・小出版流通センター　〒162-0836　東京都新宿区南町20
編集　アクセス編集委員会　TEL.03-3260-0355　FAX.03-3235-6182

那覇の市場で沖縄の本を売る
―市場の古本屋ウララ、どうにか5年

文・市場の古本屋ウララ　店主　宇田智子

那覇の市場中央通り、第一牧志公設市場の向かいで古本屋をやっている。地元の人や観光客の行きかう場所で、主に沖縄に関する本を売っている。

2011年の開店からずっとひとりでやってきたのだけれど、わけあって今年の春から店番を知人たちに日替わりでお願いしている。月曜日は浦添にある古本屋の小雨堂さん、水曜日は那覇の出版社ボーダーインクさん、木曜日は八重瀬で開業準備中のくじらブックスさん、金曜日は那覇の古本屋ちはや書房さん、土曜日は友人のGさん。みな別に本業がありながら（というよりライバルでもありながら）、毎週市場に来て、店先に座ってくれている。

市場中央通りにせり出した店構え。店主は右の棚の裏に座っている

それまでは、店にはほぼ常に私がいた。店のすべての本に触り、すべてのお客さんに会ってきた。店の写真を撮れば私も写りこむ。まるで店の一部だった。

いま、店に行くとほかの人が座っている。自店の本、自社の本も持ってきて自由に並べてもらっているから、売上帳を見れば私の知らない本が売れている。店番の人とお客さんが楽しげに話していたりもする。見慣れているはずの店のあちこちが微妙にずれていて、なんだかパラレルワールドに来たようだ。自分を外から眺めているみたいな。そんな言い方が大げさでないくらいに、この狭い空間が、この5年間の私のすべてだった。

2000坪の新刊書店から1.5坪の古本屋へ――理想と、それより面白い現実

勤めていた2000坪の新刊書店を辞めて、1.5坪の古本屋を始めた。親しい人に「転落の人生だ」と笑われたり、知らない人から「立派な志ですね」と褒められたりして、「どうしてそんな決断をしたのか」と何度となく尋ねられた。

そもそもは東京の書店で働いていて、沖縄に支店が出るとき異動してきた。沖縄には電車がなく（モノレールはある）、スーツ姿の人も少なく、東京にいるときよりだいぶ息がつける感じがした。

書店員の仕事のうえでも、沖縄は魅力的だった。地元の出版がさかんで、「沖縄県産本」という呼び方まである。

那覇の市場で古本屋　ひょっこり始めた〈ウララ〉の日々／宇田智子著／ボーダーインク刊／四六判 224頁／1,600円＋税／ISBN978-4-89982-241－7

向かって右の部屋に沖縄本、左の部屋にそれ以外の本を置いている

書店には郷土本コーナーがあり、売上ランキングにも必ず沖縄関連本が入る。書く人、読む人、出す人、売る人が身近にやりとりしあい、読んでいた人が書く人に変わることもある。本が暮らしに密着している様子にあこがれ、自分も売り手として関われるのがうれしかった。

会社員でいる限り、いずれまた県外の店に異動する可能性があった。戻りたくないと思う気持ちがしだいに強くなった。満員電車には乗りたくない。沖縄で沖縄の本を売る仕事をこれからも続けたい。地元の人だけでなく、県外の人にも沖縄の本の面白さを知って欲しい。絶版になった本も多いから、古本も扱いたい。そんなことをぼんやり考えていたらいろいろなタイミングが合って、小さな古本屋を始めることになった。

5年間やってみてどうかというと、なかなか理想通りにはできない。一番の壁は仕入れだ。新刊書店なら取引のある出版社に注文をすればたいていの本は入れてもらえたけれど、古本屋の仕入れは業者の市での競りや個人のお客さんからの買取が主で、欲しい本がいつも手に入るとは限らない。さらに個人的な事情として、店に自分しかいないので出張買取に出づらく、体力がなくて大量の仕入れもできず、店が狭くてあまり在庫が置けない、といった問題もある。

そして、自営業の厳しさ。店を始めたらひとりひとりのお客さんとじっくり向き合って、図書館のレファレンスサービスのようなことがしたいと夢みていたものの、どんなに時間をかけて応対したところで、本が売れなければお金は入ってこない。会社員のときは、直接の売上に結びつかなくても、「お客さんが喜んでくれるなら」と気楽に考えていた。いまは電話代さえも気になってしまう。本屋の収入は本を売ることでしか得られない、そんな当たり前のことがわかっていなかった。

それでも店を開ければ人が来てくれて、本が売れる。人が来てくれるのは目の前に公設市場があるおかげで、この場所でなければ店を続けるのは難しかっただろう。

ときにはお客さんが本を見ながら思い出を語ってくれ、まわりの店の人が市場の歴史や商売の心得を教えてくれ、県外から思いがけない人が訪ねてくる。自分の頭で考えた理想よりずっと面白いものが、日々舞いこんできた。

古本の仕入れが思うようにできないぶん、新刊を仕入れた。店に常備したい本や、通りを歩く人の目を引きそうな本を選んで、出版社に直接連絡をとった。新刊の仕入れ値は売り値の7～8割で、古本に比べるとずっと高いけれど、それで棚が華やかになるならかまわない。特に、直取引のみの本やリトルプレスには沖縄で扱っている店のないものが多く、積極的に仕入れた。

2年ほど前から、沖縄県産本の新刊コーナーもつくった。古本ではなく新刊を並べることで、沖縄の出版の活きのよさを伝えられると思った。沖縄でとれた魚を市場で買うように、沖縄でつくられた本を市場で買ってもらいたい。わずかな冊数しか注文できないのに、出版社の人たちはいつも快く持ってきてくれる。

『ジュニア版琉球・沖縄史』（編集工房東洋企画）や『ひとことウチナーグチ』（沖縄文化社）は、沖縄の歴史や言葉の入門書としてお客さんにおすすめしている。『復帰前へようこそ』（新星出版）の写真は市場の人たちを懐かしがらせ、地元紙に連載中の4コマ漫画『おばぁタイムス』（沖縄タイムス）は子どもたちの足を止める。ふだん書店に行かない人にも、ショーケースのように沖縄県産本を見せたい。その点で、市場中央通りという立地はとてもいい。

沖縄県産本を書いて出す――『那覇の市場で古本屋』、その後

そして、私自身が沖縄県産本の売り手から書き手にもなった。2013年7月、ボーダーインクから『那覇の市場で古本屋　ひょっこり始めた〈ウララ〉の日々』を出してもらった。

左の部屋。幅が90センチしかなく、体格のいい人は入れない。古本のほか、新刊書やリトルプレスもある

右の部屋、沖縄文学のコーナー。沖縄で知り合った人たちの本も並び、店主にとっては愛着がある

狭い中にも飾り棚をつくるなど工夫してある。棚は〈ウララ〉の前身〈とくふく堂〉から受け継いだ（詳しくは著書で！）

このとき、開店してまだ1年半しかたっていない。店としての実績も信用もないのに本を出すなんて無謀すぎると、自分でもわかっていた。それでも出してしまったのは、この店の毎日の話を誰かに聞いてもらいたかったから。特に役に立つわけでもない、ささいなエピソードばかりだけれど、ここにこんな人が来たこと、こんな本があったことを書きとめておきたいと思った。沖縄県産本には自費出版の自伝も多く、それを見ていてそんな気になったのかもしれない。作家が書いたものでなくても、昔の沖縄や人の様子が書かれた文章は面白かった。

本を出してから3年たち、町も市場も少しずつ変わっている。アジアからの観光客が増え、新しいホテルが建った。市場のまわりに小さな飲み屋がどんどんできて、昼間から「せんべろ」でにぎわうようになった。本の表紙に写っているお隣の漬物屋さんと、本文中で自転車を見つけてくれた2軒隣の洋服屋さんは閉店してしまった。

私の店は、平台の高さを上げて会計用のカウンターをつくった。定休日を1日増やした。『那覇の市場で古本屋』が韓国語に翻訳されて、韓国のお客さんが来るようになった。そして、知人たちが店番してくれるようになった。

私が店に立てないあいだはみんなが店を開けてくれている、と人に話すと、そんな虫のいいことがあるのかと驚かれる。本当にそうだ。もう、「ひとりで店をやっている」というのはやめよう。平台の工事だって韓国語の翻訳だって人にやってもらった。自分だけでは何もできないと身にしみた5年間でもあった。

近いうちに私も店に復帰する。これまでやってきたことを再開し、理想もあらためて追いかけつつ、また新しいかたちをつくっていく。助けてくれる人たちにせいいっぱい恩返ししながら、さらに5年、10年と店を続けていきたい。

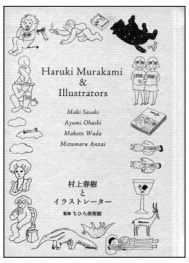
＊

（うだ　ともこ／市場の古本屋ウララ　店主）

新刊ダイジェスト

※価格は税込（消費税率8%）表示です。

『村上春樹とイラストレーター　ー佐々木マキ、大橋歩、和田誠、安西水丸』●ちひろ美術館監修著



村上春樹のたっての願いでデビュー作『風の歌を聴け』の表紙を描いた佐々木マキ、エッセイ『村上ラヂオ』の挿絵を銅版画という新境地で彩った大橋歩、翻訳物の文学作品や互いに造詣が深い音楽をテーマに共作に取り組み、全集の装丁も手がけた和田誠、2014年に惜しくも急逝するまで30年以上にわたり、短篇、エッセイ、絵本など数々のジャンルで共作し、親交も深かった安西水丸。この4人を取り上げ、今年の8月7日まで東京のちひろ美術館で開催され、大好評を博した「村上春樹とイラストレーター」展。その図録を兼ねた本書は文庫サイズで気軽に手に取れる。イラストはもちろん、それぞれの作品に対する思いや制作技法、秘話なども満載。後半には村上春樹・和田誠・安西水丸の3人の共作についても紹介。3人の最後の共作となった『セロニアス・モンクのいた風景』の村上春樹のあとがきは心に染みる。相乗効果で現れた豊かな世界と魅力がたっぷりと味わえる。

◆1944円・文庫判・239頁・**ナナロク社**・東京・2016/7刊・ISBN9784904292662

『ボクシングと大東亜　－東洋選手権と戦後アジア外交』●乗松　優著

アジア太平洋戦争中に戦場となり大勢の犠牲者をフィリピンは出しています。そのため戦後対日感情は悪化していました。日本政府もフィリピンとの国交回復に苦慮する中、ボクシングの世界においてはいち早くフィリピンとの交流が再開しました。本書はその軌跡を詳しく辿っていきます。そこに関わってくる人物達は、スポーツをテレビの普及に生かそうとする正力松太郎、新興ヤクザにして名プロモーターの瓦井孝房など個性的な人物ばかりです。さらには玄洋社の頭山満を尊敬していたという後楽園スタヂアムの田辺宗英。彼はボクシングを国民の自信の回復につなげようという思惑もありました。一方で東洋選手権という形で現れたそれは、戦前の「大東亜」さえも思い起こさせます。その中でフィリピンは追いつき乗り越える存在としても捉えられていました。日本のボクシングが戦後発展していく中に渦巻いていていた、関係者の野望と思惑が興味深く描き出されています。

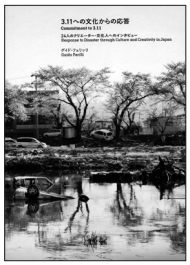
◆ 2376円・四六判・319頁・**忘羊社**・福岡・2016/7刊・ISBN9784907902117

『平久保半島サガリバナの原風景　－国立公園指定記念　石垣島平久保半島』●大塚勝久著

2016年4月環境省は、日本最南端の西表石垣(いりおもていしがき)国立公園（沖縄県）に、新たに発見された平久保半島のサガリバナの大群落を追加指定した。　サガリバナはサガリバナ科の常緑高木で、夏、夕闇が迫るころ丸い蕾がほころびはじめ、夜、花は全開となり、白、ピンク、赤、うす黄の花がほのかな甘い香りを漂わせる。翌朝、朝日を浴びて散りはじめ、樹下の水面に花が浮かぶ様は、まるでメルヘンの世界を思わせる。本写真集は、このような星空のもとに繰り広げられる幻想的な風景を余すところなくとらえて圧倒的に読者に迫る。この平久保半島のサガリバナ群落一帯は、発見者をはじめとする地元の人たちによって清掃・整備されると、やがて清らかな水が流れ出し、アカショウビン、メジロ、フクロウ、カンムリワシ、オオゴマダラチョウ、ドジョウ、オキナワアナジャコなどの生き物が現れてかつての自然が蘇り、復活した豊かな生態系を本書でも目にすることができる。

◆ 3240円･260mm × 260mm判･68頁･**南山舎**･沖縄・2016/5刊・ISBN9784901427388

『3.11への文化からの応答　－24人のクリエーター・文化人へのインタビュー』●グイド・フェリッリ著



著者は文化経済、文化創造産業、地域開発を専門とするミラノIULM大学助教で、東日本大震災以前に、学生との研修旅行で2度東京に滞在した経験をもつ。3.11当日、テレビに映し出される惨状に衝撃を受け、募金や日本製品購入運動に参加する。一方で、文化分野の研究者として、「この悲劇的な出来事を文化や創造を通じて新陳代謝（メタボライズ）する、日本社会の許容力に焦点を置く」調査を模索し、2011年10月から翌年にかけて5度来日、未来芸術家遠藤一郎、音楽家大友良英、せんだいメディアアテーク企画・活動支援室室長甲斐賢治、華道家假屋崎省吾、脚本家・放送作家小山薫堂、文化庁長官近藤誠一ら文化に関わる様々な人物にインタビューする。本書はその25名の経験を伝える。東北地域におけるアーチストの存在意義を、「表現や芸術的実践を通し、地域住民とともに変化を思考することができる」ことと指摘するなど、文化の役割を力強く浮かび上がらせている。

◆ 2484円・A5判・241頁・**赤々舎**・東京・2016/5刊・ISBN9784865410334

『戦後編集者雑文抄　－追憶の影』●松本昌次著

かつて「戦後の名著の多くはこの人の手になるものだった」（『サンデー毎日』書評欄）とまで言われ、語り書きの『わたしの戦後出版史』が今世紀初頭の名著として朝日新聞の「ゼロ年代の50冊2000－2009」の1冊に選ばれた「生涯現役編集者」松本昌次。その松本昌次の好評『戦後文学と編集者』『戦後出版と編集者』（いずれも一葉社刊）に次ぐ、待ちに待った「戦後編集者シリーズ」第3弾。

今回の主な「戦後人」は、秋元松代、石川逸子、井上光晴、上野英信、木下順二、久保栄、西郷信綱、島尾敏雄、武井昭夫、竹内好、中野重治、長谷川四郎、花田清輝、埴谷雄高、藤田省三、富士正晴、松本清張、丸山眞男、溝上泰子、宮岸泰治、宮本常一、吉本隆明に加えて、チャップリン、ブレヒト、リリアン･ヘルマン、ワイルダーなども。これら「戦後」を創造し先行し体現した人たち――その影となって同時代を伴走した一編集者の､「戦後」にこだわり「戦後精神」の遺志を継いだ貴重な証言集。

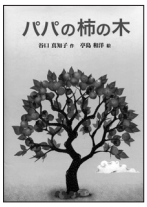
◆ 2376円・四六判・278頁・**一葉社**・東京・2016/7刊・ISBN9784871960601

売行良好書

期間：2016年7月15日～8月15日

［出荷センター扱い］ ※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『村上春樹とイラストレーター』1944円・ナナロク社　(2)『肉にガブリつく！』1404円・椎名誠旅する文学館　(3)『パパの柿の木』1728円・星湖舎　(4)『ブックトークのきほん』648円・東京子ども図書館　(5)『川原慶賀の「日本」画帳』2916円・弦書房　(6)『古代の近江』3240円・サンライズ出版　(7)『満州国の最期を背負った男・星子敏雄』2160円・弦書房　(8)『赤ずきんとオオカミのトラウマ・ケア』1944円・アスクヒューマンケア　(9)『ボクシングと大東亜』2376円・忘羊社　(10)『発達障害者と自動車運転』1296円・エンパワメント研究所　(11)『炭坑の絵師　山本作兵衛』1944円・書肆侃侃房　(12)『三江線写真集』2160円・今井出版



［三省堂書店神保町本店　センター扱い図書］ ※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『村上春樹とイラストレーター』1944円・ナナロク社　(2)『吉野朔実は本が大好き』3240円・本の雑誌社　(3)『本の雑誌　３９９号』720円・本の雑誌社　(4)『東京かわら版　８月号』500円・東京かわら版　(5)『水玉螢之丞作品集　ワンフェスのワンダちゃん』2500円・本の雑誌社　(6)『天使は本棚に住んでいる』1404円・本の雑誌社　(7)『たべるのがおそい　ｖｏｌ．１』1404円・書肆侃侃房　(8)『餃子バンザイ！』1296円・本の雑誌社　(9)『歴史家の城歩き』2700円・高志書院　(10)『バルト三国』1728円・書肆侃侃房

［ジュンク堂書店池袋店　地方出版社の本―センター扱い図書］ ※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『平成２８年熊本地震　一カ月の記録』1200円・熊本日日新聞社　(2)『出口王仁三郎聖師　善言美詞　祝詞解説』1512円・みいづ舎　(3)『やえやまガイドブック　改訂版』1296円・南山舎　(4)『北の詩と人』2970円・岩手日報社　(5)『古代ギリシャ語語彙集　改訂版』3240円・大阪公立大学共同出版会　(6)『古代の近江』3240円・サンライズ出版　(7)『北九州・京築・田川の城』1944円・花乱社　(8)『川原慶賀の「日本」画帳』2916円・弦書房　(9)『戦争とおはぎとグリンピース』1512円・西日本新聞社　(10)『出産・育児ママのトリセツ』1512円・忘羊社　(11)『高尾山・景信山　陣馬山　登山詳細図』823円・吉備人出版

以下ホームページ等でも各種情報提供を行なっております。ご利用ください。
ＵＲＬ：http://neil.chips.jp/chihosho/　　ツイッター公式アカウント：@local_small

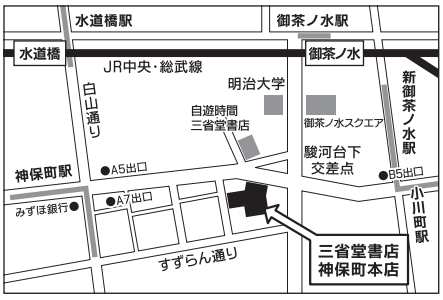
トピックス ―― ★★★

▼明治大学の生涯教育機関であるリバティアカデミーと本の街神保町を元気にする会が、今年も公開講座を開講します。今年のテーマは**【本の街の食文化】**。学校法人共立女子学園共催。〈本の街・神保町は、実は食の街でもあります。吉田健一が愛した「ランチョン」は明治42年の創業で、東京のビアホールの草分けと言われます。スマトラカレーの「共栄堂」は、『南洋年鑑』を著した伊藤友治郎からノウハウを学び大正13年に開業。昭和6年創業の天麩羅『神田はちまき』には江戸川乱歩、井伏鱒二の姿が。学生たちのたまり場であった「さぼうる」をはじめ、「ミロンガ・ヌオーボ」、「ラドリオ」などの喫茶店も欠かせません。そして、神保町中華街とまで言われる中華料理店。鰻、蕎麦、寿司、ラーメン、洋食、エスニック、和・洋菓子。夜には赤ちょうちん。本の街にどうしてこれほど多様で豊穣な食文化が育まれたのでしょうか。その歴史や出入りした人々の姿などを探りながら、本をスパイスに、この街ならではの食の魅力を味わいたいと思います〉（講座主旨より）。2016年10月1日～2016年11月26日、詳細は「本の街の食文化」でネット検索を。

郵便販売のご注文方法

◎お名前、お届け先（郵便番号、住所）、連絡先お電話番号、ご注文品の書誌名、冊数の必要事項を明記のうえ、下記までＦＡＸでご連絡ください。
◎送料は、冊子小包・メール便共実費でお送りさせて頂きます。基本的にメール便は、一冊２１０円でお送り致します。（メール便の到着は、発送してから３～４日かかります。）お急ぎの方、その他ご要望がございます場合はお気軽に下記までお問い合せ下さいませ。
◎なお書籍お買上総計（税抜き価格）が5,000円以上の場合は、送料をサービスさせて頂きます。

★地方・小出版流通センター
ＦＡＸ：０３－３２３５－６１８２

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。

BOOKS SANSEIDO
三省堂書店
営業のごあんない
神保町本店 ４階
地方出版・小出版物フロア
営業時間　10：00 AM～8：00 PM
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-1
TEL. 03-3233-3312(代)
URL. http://www.books-sanseido.co.jp
本店4階売場では、地方・小出版流通センター扱いの新刊全点のほか、地域別に書籍を取り揃えております。また、地域ならではのタウン誌、趣味の雑誌も扱っております。